

初・再診料等が外来医療費に占める割合が高いのは内科より皮膚科

医科医療費に占める初・再診料等の割合が高いのは診療所で、病院の7倍。厚労省が1月14日の中医協・診療報酬基本問題小委員会（委員長＝遠藤久夫・学習院大学経済学部教授）に提出した資料で、総医療費に占める初・再診料等（初診料、再診料、外来管理加算、外来診療料）は、医科全体では9.5%だが、病診別に見ると診療所が21.0%に達するのに対し、病院は3.0%であることがわかった。診療所でも診療科によって初・再診料等が外来医療費に占める割合は異なり、皮膚科や耳鼻いんこう科では4割前後と高かったが、内科は2割に満たなかった。

2008年度改定で導入された“5分ルール”について「診療所への影響が大きい」と日医が見直しを求めている外来管理加算は、皮膚科や内科、外科で外来医療費に占める割合が高かった。



65歳以上の初診で多い疾患は皮膚疾患や白内障

また、初診料の算定回数が多い疾患は、全体では「急性気管支炎及び急性細気管支炎」が最多だが、65歳以上では「皮膚炎及び湿疹」や「白内障」などがそれを上回っていた。

年齢別初診料算定回数上位疾患

	全体	1カ月当たりの算定回数	65歳以上	1カ月当たりの算定回数
1	急性気管支炎及び急性細気管支炎	1738千回	皮膚炎及び湿疹	286千回
2	皮膚炎及び湿疹	1653千回	白内障	209千回
3	急性咽頭炎及び急性扁桃炎	980千回	脊椎障害(脊椎症を含む)	184千回
4	屈折及び調節の障害	963千回	関節症	138千回
5	腸管感染症	800千回	急性気管支炎及び急性細気管支炎	120千回

中医協資料をもとに作成

一方、再診料では、全体と 65 歳以上で傾向は変わらず、「高血圧性疾患」が最も多く、次いで「脊椎障害（脊椎症を含む）」だった。

年齢別再診料算定回数上位疾患

	全体	1カ月当たりの算定回数	65歳以上	1カ月当たりの算定回数
1	高血圧性疾患	16.3百万回	高血圧性疾患	11.5百万回
2	脊椎障害(脊椎症を含む)	5.1百万回	脊椎障害(脊椎症を含む)	4.0百万回
3	糖尿病	4.2百万回	関節症	3.1百万回
4	関節症	3.9百万回	糖尿病	2.6百万回
5	腎不全	2.8百万回	白内障	1.5百万回

中医協資料をもとに作成

日医が外来管理加算についてアンケート結果を提出

外来管理加算に導入された“5分ルール”の影響が大きかったことを問題視する日医は、08年11月に会員を対象に実施したアンケート調査(回答数:1,972施設、回答率:45.4%)の結果速報を提出し、「当初の見込みを大幅に上回る減額だ」と時間要件の撤廃を求めた。

アンケート結果によると、08年4月以降に外来管理加算の算定を止めた施設は5.9%で、その理由は「おおむね5分超を満たさない」(67.9%)や「患者への説明困難」(27.7%)だった。これについて対馬忠明委員(健康保険組合連合会専務理事)は、「これらの理由で算定を止めるということは、それまでどういう状況にあったのか」と疑問を呈し、小島茂委員(日本労働組合総連合会総合政策局長)も「5分ルールが導入されたから患者への説明が困難になったとは考えられない」と反論した。

また、看護している家族等から症状を聞いて薬剤を投与した場合に算定できなくなったことを「不適切」とする回答が56.0%に上ったことについて、「基本的に本人に説明すべきだ」と設問自体を疑問視する対馬委員に対し、藤原淳委員(日本医師会常任理事)は「家族への説明でも結果責任を伴うのは同じなのに、対価が異なることが現場で問題になっている」と訴えた。

08年4～9月の医療費は対前年同期比2.2%増

同日の基本小委では、08年4月から9月までの概算医療費の動向について厚労省が報告した。それによると、1日当たり医療費は対前年同期比2.8%増となったが、患者数を表わす受診延日数が同0.6%と微減し、医療費としては同2.2%増となった(いずれも稼働日数を補正しない数値)。委員からは、大学病院の伸び率が他に比べて高かったことから「08年度改定で手厚くした影響か」と質問が上がり、それについて佐藤敏信医療課長は「(改定後の)社会医療診療行為別調査の結果が出ていない状況で、増点や新設した項目の影響が医療費に反映されたかを個別に説明するのは難しいが、特定機能病院に着目して点数を付けたので、影響がある可能性はある」と答えた。